

平成23年 5月19日現在

機関番号：32689
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2010
課題番号：21720056
研究課題名(和文) 小劇場演劇の軌跡——状況劇場と演劇センター68/71の移動公演・メディア戦略
研究課題名(英文) Following the track of the Little Theatre Movement: the media strategy and traveling theatre of Situation Theatre and Theatre Centre 68/71
研究代表者
梅山 いつき (UMEYAMA ITSUKI)
早稲田大学・演劇博物館・助手
研究者番号：50505401

研究成果の概要(和文)：

本研究は1960年代半ばに隆盛を極めた小劇場演劇のなかでも劇団状況劇場と演劇センター68/71のメディア戦略と移動公演について、ポスターや機関紙の分析を通じてその詳細を明らかにしようとするものである。本研究では両劇団の移動公演の実態調査とポスターや機関紙の分析を合わせて行い、地方調査で得られた証言や収集した一次資料から当時の上演がどのような制作体制に支えられていたのか明らかにするとともに、マニフェストと調査結果の比較を行った。

研究成果の概要(英文)：

Many experimental theatre troupes, known as Little Theatre or Angura (underground or avant-garde theatre), emerged in the middle of the 1960s. Today, Little theatre is regarded as an important movement in Japanese contemporary performing arts, but despite its importance, few approaches have been made to clarify the actual situation of its performances. This research picks up two theatre groups: Jokyo gekijou (Situation Theatre) and Engeki Centre 68/71 (Theatre Centre 68/71), and attempts to clarify its media strategy and traveling theatre by way of analyzing posters and handbills. Posters were a very important means by which Little Theatre. They conveyed performance company's messages and intentions. There are some studies featuring the designs of posters, but few have linked such designs to the forms of performances. Therefore, this research attempts to correlate the designs of posters and handbills with the structures of the stages or the places of performances.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成21年度	1,900,000	570,000	2,470,000
平成22年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：日本近現代演劇

科研費の分科・細目：芸術学／芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：現代演劇・文化政策・グラフィック・芸術学・舞台芸術

1. 研究開始当初の背景

本研究が調査対象とする劇団状況劇場(以下、状況劇場)と演劇センター68/71(以下、

演劇センター)とは1960年代半ばからはじまった小劇場運動の中核をになった演劇集団である。両演劇集団を含むいくつかの劇団は小劇場演劇またはアングラ演劇と呼ばれてい

る。小劇場演劇は現在の日本演劇の礎となったとされており、演劇史上重要な位置づけをなされていながら、これまで学術研究の場で積極的に論じられることは少なかった。また、関係者の大半が存命であることから、過去の上演に関連する資料を収集・保存することへの切迫感が起こりにくいこともあり、小劇場演劇は神聖視される一方で、その実態はこれまで明らかにされてこなかったのである。よって、小劇場演劇を研究するにあたってはまずより多くの一次資料の収集が必要となる。そして当事者や創作現場に関わった人物からの聞き取り調査を行うことで、これまで曖昧に語られてきた創作現場の実態を明らかにすることがもとめられる。

先行研究では状況劇場と演劇センターを含め、小劇場演劇は次の三つの特徴が指摘されてきた。三つの特徴とはひとつは先行芸術である新劇が戯曲中心の演劇であったことを批判し、俳優中心の「肉体の演劇」を展開したことであり、第二に前近代の芸能を取り入れたことである。そして学生運動や新左翼との近接関係が第三の特徴である。こうした見方において忘れられてきたことは、小劇場演劇の多くが上演と平行してポスターや機関紙を発行するなどの言語活動を活発に行っていたということである。三つの特徴のなかでも「肉体の演劇」というイメージが先行することで、言語活動はその重要性にも関わらず切り捨てられてきたのである。では、なぜ小劇場演劇は活発な言語活動を展開しながら上演を行っていたのか、そして言葉が重要な役割をはたしていたにもかかわらず、作品が「肉体の演劇」とされたのはなぜなのだろうか。小劇場演劇が誕生して約半世紀が経った今日、当時について再考する時期に差しかかっている。よって、これまでの見方に頼らず、当時を知る関係者からの聞き取り調査や上演関連資料を収集し、上演に関する情報を今一度精査する必要がある。以上の問題意識のもと、小劇場演劇に関する一次資料を広く収集し、検証することを目的とした本研究を着想するに至ったが、より具体的に調査を進めるべく、小劇場演劇のなかでもテント公演という当時を象徴する公演スタイルをとり、豊かな言語活動を展開した状況劇場と演劇センターを取り上げることとした。

2. 研究の目的

本研究では上記の研究状況を背景として、状況劇場と演劇センターの活動について移動公演とメディア戦略というふたつの視点から考察する。状況劇場は紅テント、演劇センターは黒テントという両劇団ともテントでの地方巡業公演を行っていた。さらに、上演時にはかならず巨大なポスターや機関紙を制作していた。そこで本研究では両劇団の地方巡業

公演がどのような制作体制に支えられていたのか、また両劇団がどのようなメディア戦略を立てていたのか明らかにすることを目的とする。まず、状況劇場については、当劇団が1969年に行った「紅テント・南下公演」を取り上げ、両公演がどういった制作体制のもと上演されていたのか調査する。演劇センターについては、1970年に上演された『翼を燃やす天使たちの舞踏』の大阪、名古屋公演と、70年代中旬に繰り返し上演された『喜劇昭和の世界』の上演を取り上げる。本研究では以上の公演を中心に調査を進め、両劇団の活動をより具体的に把握することを目指す。また、こうした調査と平行して作品分析も行い、作中どのような身体表象が認められ、それらは移動公演という上演スタイルやマニフェストの発行といった言語活動とはどのような関係にあるのかも考察する。

3. 研究の方法

本研究では次の三つの柱を立てて調査を進めた。

(1) 当事者からの聞き取り調査

唐十郎や佐藤信といった両劇団の制作の中心を担った人物や、地方公演の際に現地の受け手を担当した人物たちから聞き取り調査を行う。

(2) 上演場所等の実地調査

状況劇場の「紅テント・南下公演」と演劇センターの『翼を燃やす天使たちの舞踏』そして『喜劇昭和の世界』で実際に訪れた地方都市を訪問し、どのような環境下で上演が行われたのか調査を行う。

(3) 作品分析

調査対象としている作品の戯曲分析。また、同時期の唐十郎、佐藤信作品についても分析する。舞台写真やチラシ、プログラムなどの上演関連資料の収集も平行して行い、複合的な分析を目指す。

2年間の研究計画は下記の通り。

[2009年度]

小劇場演劇全般についての基礎的な調査を行い、本格的な調査のために関係者とコンタクトをとるなど事前準備を行う。また、状況劇場と演劇センターについて本研究が焦点を当てている70年代初頭以外の活動についても資料を収集し、両劇団の活動の全容を把握する。年度の後半から上演場所の実地調査と当事者からの聞き取り調査を開始する。

[2010年度]

前年度の基礎的な調査を経て、引き続き上演場所の実地調査と当事者からの聞き取り調査を行う。調査結果をまとめ、演劇博物館主催の企画展を通して成果を発表する。

4. 研究成果

[2009 年度]

2009 年度は基礎的な調査として海外調査を 2 件、国内調査を 1 件行った。また、年度の後半から実地調査を開始し、名古屋、沖縄、博多の 3 都市を訪問し、現地調査の他、関係者からの聴き取り調査も行った。以下に調査の概要と成果を記す。

(1) 海外調査

まず日本の新劇および小劇場演劇と北欧演劇との影響関係の調査として、舞踏や現代演劇を中心に現在も活発な交流公演が行われているフィンランドへ赴き、手がかりとなる資料や情報の収集を目的に調査を行った。フィンランド演劇博物館の展示から、1930 年代および 70 年代のフィンランドと日本の演劇状況には、上演レパトリーとの点で重なる部分があることがわかり、両者の接点を見出すことができた。次にフランス・パリにて日本の小劇場演劇が 1970 年代初頭に行った公演に関して資料調査を行った。70 年代初頭から 80 年代にかけて、演劇センターや早稲田小劇場や転形劇場がパリやフランス郊外でのフェスティバルにて上演しており、そうした活動の軌跡がたどれる資料の有無を調べた。

(2) 国内調査

①京都造形芸術大学主催の研究会「ダンスと実験 vol.2 土方巽～ことばと身体をめぐって～」へ参加し、舞踏家・土方罪に関する研究発表を聴講した。土方は小劇場演劇に多大なる影響を与えると同時に、本研究で課題としている演劇人の言語活動と身体との接点を考察する上でも本研究集会有益であると考え参加した次第である。当日は研究発表やシンポジウムの他、舞台映像の上映もあり、映像を通して土方やそれに象徴される 1960～70 年代の身体性のより具体的な検証に立ち会うことができた。

②演劇センターの巡業公演を調査すべく、巡業公演を行った地方のひとつである岡崎市に赴き、当時の制作担当者（劇団白髪小僧の主催者・馬場利夫氏）からの聴き取り調査を行った。当時どのような受け入れ態勢のもと、上演を実現させたのか、特徴や問題点等を含め伺った。馬場氏は状況劇場の受け入れにも協力しており、両劇団の違いについても伺うことができた。

③沖縄・那覇市へ赴き、1975 年に演劇センターと那覇市との間で争議となった『喜劇昭和の世界』上演不許可事件に関する情報の収集と現地関係者からの聴き取り調査を行った。公演予定地であった公演や、抗議デモを行った国際通りを中心に現地調査を行った。

④福岡・博多にて演劇センターおよび状況劇場の九州公演に関する情報収集を行った。福岡では状況劇場の地方巡業に関係し、現在も当劇団の創作に携わっている津田三郎氏から

聴き取り調査を行った。小倉では北九州芸術劇場主催のシンポジウム「地域を耕す」に参加。現在の地方演劇の現状をめぐる討論を聴講し、70 年代のテント公演が現在の地域公共劇場創設のどういった部分に影響を与えているのか検証する上での貴重な情報を得ることができた。

(3) 成果発表

2009 年度の調査については雑誌論文④、⑤として発表した。④は演劇センターの活動方針に言及したもので、当初立てていた方針と調査で明らかになった地方の制作体制とを比較した。合わせて『翼を燃やす天使たちの舞踏』の戯曲構造を制作体制の実態に重ねて考察した。⑤は海外調査を中心に進めた小劇場演劇に関する基礎的な調査をまとめた論考である。

[2010 年度]

2010 年度は、昨年に引き続き現地調査を行うとともに、収集した上演関連資料の考証作業を中心にを行い、最終的に成果は演劇博物館主催の企画展を通して発表した。

(1) 海外調査

アメリカ・イリノイ大学を訪問し、同大学所属のデイヴィッド・グッドマン教授に面会した。グッドマン教授は演劇センターの初期メンバーであると同時に、日本現代演劇研究者として唐十郎作品の英訳も手がけている方である。訪問期間中はグッドマン氏から二度の聞き取り調査に御協力いただき、所蔵資料をご紹介いただき、移動公演というスタイルに対する見解や、劇団の制作体制についての証言を得ることができた。

(2) 国内調査

①沖縄にて 7 月 17 日～25 日にかけて開催された「2010 年国際児童・青少年演劇フェスティバルおきなわ」に参加し、演劇センターの立ち上げメンバーである佐藤信および加藤直の新作舞台とその創作に立ち会った。また、フェスティバルの会期中にはふたつの国際シンポジウム（「平和構築のための児童・青少年演劇の可能性」、「アジアのアーティストネットワークの構築と活動拠点の形成」）が開催された。このシンポジウムには演劇センターが交流をもっていたフィリピンの演劇集団 PETA のメンバーが参加しており、両者の交流について話を伺うことができた。

②大阪の劇団犯罪友の会主宰の武田一度氏に面会し、演劇センターと状況劇場のテント興行が大阪を中心とする関西圏の演劇にどのような影響を与えたのか伺った。関西圏の演劇にとって特に状況劇場の影響は大きく、唐十郎の演出方法や劇作を継承しようとする劇団もいたが、唐たち関東の移動演劇集団との決定的な違いは劇場機構にある。関東は全国を

移動するためにテントが主流であるが、関西の野外演劇は移動せず、一カ所に大掛かりな仮設劇場を建てる。両者の違いの原因はそれぞれの公有地をめぐる状況が異なることが大きい。武田によれば、状況劇場のような先行世代とは違う表現をもとめた結果このような上演スタイルになったとのことである。

(3) 成果発表

二年間の調査で得られた資料や証言は①～③の論文と、イギリスにて開催された国際学会にて調査の一部を報告し、海外の研究者に対しても成果を発信することができた。さらに、計画当初から予定していた演劇博物館における企画展示「広場をつくる・広場を動かす～日本の仮設劇場の半世紀展」を通じて広く社会に向けて成果を発表することができた。本展示では関係者からの聴き取り調査や、調査の過程で収集した舞台写真等を図録としてまとめた。展示および図録では、状況劇場、演劇センターだけでなく、地方公演の制作を支えた未知座小劇場や劇団白髪小僧、劇団犯罪友の会等合計8劇団を取り上げた。こうした劇団を大々的に取り上げ、制作体制だけでなく、劇場機構についても証言や写真、図面等の資料を通じて明らかにする試みはこれまでなかったため、大きな反響を得ることができた。演劇センターおよび劇団状況劇場の移動公演については、これまで両劇団がどのような理念の下で上演活動を行っていたのかは知られていたものの、実際の制作現場の状況がどうであったのかは明らかにされてこなかった。本研究ではそうしたこれまで明らかにされてこなかった制作現場の実体を聞き取り調査から明らかにした点に意義が認められ、広く社会に対して研究結果を発信することによって、60年代以降の日本の現代演劇研究の促進に貢献できたと言える。今後は本研究の調査で得られた資料を用いて状況劇場と演劇センターの作品分析を進めていきたい。また、地方公演に携わり、両劇団の後続の世代として多大なる影響下のもと活動を展開していた劇団については、両劇団以上に研究がなされていない状況にある。とりわけ、そのほとんどの上演台本の有無が確認できていないため、作品分析が難しい。今後の調査ではこうした後続の世代についても上演台本を含めた一次資料をより多く収集し、状況劇場と演劇センターの存在が作品創作にどのような影響を与えたのか検証したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 梅山いつき, 「唐十郎『戯曲ジョン・シル

バー』分析」, 『演劇学論集』, 査読有, 第52号, 2011年, 製本中につき頁未確定.

- ② 梅山いつき, 「書くこと、行うこと——新宿梁山泊『風のほこり』」, 『シアターアーツ』, 査読無, 2011年春号, 2011年, 141-143頁
- ③ 梅山いつき, 「米軍基地を背に『平和』を訴える演劇祭: キジムナーフェスタ 2010報告」, 『シアターアーツ』, 査読無, 2010年秋号, 2010年, 35-43頁.
- ④ 梅山いつき, 「『複製』と『所有』のはざま: 演劇センターの機関誌・ポスター分析」, 『演劇研究』, 査読無, 第33号, 2010年, 1-14頁.
- ⑤ Itsuki Umeyama, “La lotta del teatro underground(ANGURA) a proposito del periodo di transizione del teatro giapponese”, CASA DEI TEATRI, *IL FIORE DEL MERAVIGLIOSO*. Roma, 2009, 27-29.

[学会発表] (計1件)

- ① Itsuki Umeyama, “Reviving Past Performance: Activities of the Theatre Museum and Its Digital Archives Collection”, Universitas21 Digital Humanities Conference “Cultural Heritage and Technology”, Birmingham, Sep, 2010.

[図書] (計1件)

- ① 梅山いつき編集, 『広場をつくる・広場を動かす～日本の仮設劇場の半世紀～展 展示図録』, 早稲田大学演劇博物館, 2011年.

[その他]

ホームページ等

- ① 「広場をつくる・広場を動かす～日本の仮設劇場の半世紀～展」紹介記事
<http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/culture/110112.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅山 いつき (Umeyama Itsuki)

早稲田大学・演劇博物館・助手

研究者番号: 50505401